

## 説教「ナオミの信仰」

ルツ記 1 : 1~13、18~22、2 : 17~22

2004.7.4

日本バプテスト同盟 横浜南キリスト教会

主の御名をほめたたえます。夏を身近に感じさせる日々が続いています。7月第一主日に、皆さんと共に礼拝をささげる恵みを感謝しています。皆さんの上に、またご家族の上に、神の恵みがあるよう 主イエスのみ名により祝福いたします。

今朝は旧約の士師記の次に置かれているルツ記を取り上げました。僅か 4 章からなる物語ですが、昔から多くの人々に愛されている美しい物語です。

その前にある士師記を見ると社会の治安が悪く、暴力や不道徳が横行していた時代に起こっていたルツ記の物語は、ある人はこれを泥沼に咲く蓮の花にたとえているほどであります。

また ルツ記に登場するルツは、イスラエル人ではない異国人でありましたが、イスラエル人である姑のナオミさんを慕って、イスラエルの神を信じるようになったことで、キリスト教会の伝道のためにもよく用いられる物語です。

実は私自身、戦後 聖書のことを殆ど知らなかった頃 追浜に住んでおりました、近くの六浦の関東学院で、宣教師がバイブルクラスを開いているそうだと聞き、英語に興味があった私は、生まれて初めて関東学院のキャンパスに足を踏み入れました。そこで老宣教師スターリング・ビースという先生の、英語のバイブルクラスに初めて出席しました。その時 先生は、落穂拾いの話をしてくれました。glean というが green ではないよ。落ちた穂をピックアップすることだ。これがわたしのルツ記との最初の出会であったのです。

さて今朝は ナオミさんの信仰と題して、ナオミさんに注目したいと思うのです。題名になっていますから、この書の女主人公はルツであると言えるかもしれませんが、ルツさんの話は姑のナオミさんなしには始まりません。反対に ナオミさんの話もルツさんなしには展開しません。一体 どちらがこの書物の主人公なのか、問題になるほど この二人は切っても切り離せない、深い関係の中で物語が展開していきます。そこで今朝は 先ずナオミさんに注目してみたいと思います。

1 節 物語はベツレヘム（エルサレムの少し南にある町、教会のクリスマスにとって忘れることのできない地名）に住む男の人が、その地方を襲った飢饉<sup>ききん</sup>のため、妻と二人の息子を連れて死海の東側にある国モアブ（現在のヨルダン国）に避難した、という書き出しで始まります。

登場人物の名前が 2 節にあります。この家族の主人はエリメレクといい、奥さんが今日お話しするナオミという人です。そして二人の息子の名もマフロンとキルヨンといいました。ところが 3 節にくると、夫エリメレクは妻ナオミと二人の息子を残して死んだと訳されていますが、原文を読むと「そして ナオミの夫エレメレクは死んだ、そして 彼女と彼女の二人の息子が残された」となります。

つまり 一家の大黒柱とも頼む主人が死んでしまった、そして 妻のナオミさんと二人の息子たちが後に残されてしまった。これがナオミさんにとって不運の始まりでした。主人を失った奥様のナオミさんはどんなに悲しみ失望し、また 不安に陥ったことでしょうか。

私ども〔日本バプテスト〕同盟の中で、昨年は働き盛りの二人の牧師が相次いで天に召されました。大変ショックなことであり、私どもの記憶に新しい悲しいことでした。お二人とも 奥様と二人の息子が残されました。

次に 4 節を見ますと、残された二人の息子は、それぞれ避難先のモアブの国の娘を奥さんに迎えたとあります。ナオミさんはご主人を失った悲しみの中で、二人のお嫁さんを、オルパとルツという新妻を与えられた事で慰めと希望を与えられ、主人を失った悲しみも薄らいでいったことでしょうか。ところがです。5 節を読んでみますと、10 年ほど生活している間に、二人の息子たちも死んだとあります。またまた大変な事が起こったというのです。

二人の息子たちが死んだというその後のところを、原文では、その妻は（ナオミさんのことです）彼女の二人の息子たちからも、又 彼女の夫からも取り残されたと訳せます。日本語の訳では 一人残された、その意味をとって訳していますが、ナオミさんを襲った不幸はご主人だけでなく、二人の息子までも失ってしまったという訳です。つまり ナオミさんにとって、血のつながった身内は一人もいなくなったということ、しかも モアブという外国の地に取り残されてしまったのです。

ナオミさんにとって、これは何と残酷な事態に直面したことでしょうか。これが 1 章 1~5 節まであっさり記されていますが、これは決してさっと軽く読み過ごすことは許されない、悲しく辛い出来事でありました。ナオミさんにとって見ず知らずの異国の地において、身内が誰も居ない未亡人として取り残されたのです。何という不幸でしょうか。そんな不幸に人は耐えられるものだろうか、ナオミさんの孤独と悲しみを深く思いやるものです。

さて この悲しい状況のなかで、ナオミさんはあることを決心します。それは 彼女の故郷ベツレヘ

ムに帰るということでした。その決心のきっかけになったことは、勿論一つには夫も息子も死んでしまっ、身寄りの者が誰もいないモアブに留<sup>とど</sup>まる理由がなくなったということですが、もう一つ決定的なきっかけとなったのは、6節の後半にこうあります。「主がその民を顧み、食べ物をお与えになったということ<sup>を</sup> 彼女はモアブの野で聞いたのである」とあります。

つまり 悲しみのどん底に沈んでしまったナオミさんに、ベツレヘムの地方では飢饉が去って、穀物の収穫が得られるようになったという、良い知らせが入ってきたのです。ベツレヘムに行けば親戚の者たちも居る。飢饉も去った。故郷ベツレヘムに帰ろうと決心したわけです。ところで この悲しみに打ちひしがれたナオミさんに、その歴史の舞台の背後にあつて、彼女の主が働いておられることを、このルツ記を読む時に心のどこかに留<sup>とど</sup>めておく必要があります。

さて、ナオミさんがベツレヘムに帰るために、モアブの地を離れる訳ですが、ここで大きな問題がありました。それは 二人の息子は死んだけれど、未亡人となった二人のお嫁さん オルパとルツも一緒でした。ところが ナオミさんは、モアブ人の娘である若いお嫁さんを、自分の故郷に連れて行ってよいものだろうかと道々考えた。そして この二人が未知の国に行くよりは、モアブの実家に帰りなさいと奨めるのです。ベツレヘムに行っても、イスラエルの人と再婚することは殆ど考えられない。従つて 今のうちに実家に戻りなさい。二人のお嫁さんの幸せを考えて、そのように熱心に奨めるので、オルパは説得に応じ 泣く泣く帰って行きました。

しかし ルツはどんなに奨めても承知せず、どうしても姑ナオミさんと一緒に行きます、死んで別れ別れになつても、いずれは同じ墓に入りたいとまで言う、ルツさんの意志は固いものでした。この辺のところは次の機会、ルツを中心に取り上げることにします。

そこで 18節を見てください。ルツがナオミさんと一緒に行くという決意が固いを見て、とあります。ヘブライ語で 頑固に固執するといった意味です。つまり ルツさんがどうしてもナオミさんと一緒に行きます、あなたから離れません。もうモアブの実家に帰れなどと言わないでください、ときっぱり言いますので、ナオミさんも根負けしたのです。もうそれ以上ルツに言うのを断念したので。ナオミさんはこの時でも、ルツと一緒に連れて行っても幸福にはしてあげられない、ましてやルツが自分のために将来 役に立つなどとは夢にも思つてはいなかつたのです。つまり、自分にとって何か有利なことになるといった期待は全くなかつたのです。仕方無しにルツを伴つて ベツレヘムにたどり着きました。

さて 次の場面は 19節ですが、十何年ぶりで故郷のベツレヘムに戻つてみると、町の女たちが驚いてナオミさんを迎え、久しぶりですね どうしましたか、ナオミ、ナオミと口々に言うことが、ナオミさんの心をいだだせたのであります。

20節を見てください。ナオミ ヘブライ語の発音ではノオミと言いますが、ナアム、ナイームも同じ語に属し、心地よい、楽しいという意味です。ナオミさんの心境はそう呼ばれることさえ苦痛と感じたのでしょう。ナオミと呼ばないで マーラー（<sup>にが</sup>苦い、<sup>つら</sup>辛い）と呼んでください。更に 21節、

ベツレヘムを出て行ったときは満たされていた（家族 4 人元気で）、しかし 主は空手・空っぽにして帰らせた。主がそうさせた！ 主が苦しめた！（悩ますの意）。全能者がわたしに災いをもたらしたのです、と。

わたしたちがこのナオミさんの言葉を聞くと、随分と恨みがましく神様に向かって毒づいているように感じます。しかし ナオミさんにとってみれば、夫も息子たちも失って 丸裸で哀れな姿で帰ってきたわけです。この言葉は恨み言ではなく、この様な不幸に追いやったのは主のほかにはない。主がこんな不幸な目に遭わせたのですと 事実を率直に語ったのです。

わたしたち日本人だったら、感情を押し殺して 黙って独り悲しみ、涙に暮れるところかもしれません。しかし ヘブライ人は詩編にしばしば見られるように、自分の苦しい状況を率直に神にぶちまけています。主よ、何故 こんな災いが下るのですか、いつまで こんな不幸が続くのでしょうかと訴えています。そのように 自分の悲しみや苦しみを率直に神にぶちまけ、周りの人々に、このように主がこんなにわたしを不幸にしたのですと、人目もはばからず、心の思いを表現するのです。これは心理的にはよいことです。

思い切って心の内を吐き出して、ぶちまけて神様に訴える。それは不信仰でなく、それが神への信仰の表現であると言えるのです。民 11 章、荒野の旅を導くモーセは、民がしばしば不平を言うので、いつも主と反抗する民との間に立って、主をなだめるとりなしの勤めを続けますが、時にはこんな大変な仕事を続け、約束の地に連れていけと言うのですか、もう耐え切れません。それでもやれと言うなら わたしを殺してください！（民 11 : 15）とまで言うところがあります。どこか似ていないでしょうか。

さて ナオミさんとルツさんがベツレヘムに着いたとき、丁度 大麦の刈り入れが始まった頃であった（1 : 22）。そして 次の場面が展開します。2 章に入ると、ルツが早速 落ち穂拾いに行かせて下さいと言って出かけます。古くから 貧しい者のために落ち穂は拾わずにおき、隅は刈るなど言われています（レビ 19 : 9~10、23 : 22、申 24 : 19~22）。収穫している場所に行って、麦刈りした後に落ちた穂を拾わせて貰うのです。そして 麦刈りしているところを探して、落ち穂を拾わせて下さい、そう言って許しを得て 落ち穂を拾い始めるのです。

そのことを 3 節、そこはたまたまエリメレク一族のボアズの所有する畑地であった。たまたま・・・するとは、ヘブライ語で カーラー ミクレ、直訳すると、彼女に偶然が起こって、つまり偶然にもボアズの畑地に行ったというハプニングなのです。将に出会います。全くの偶然というのですが、気をつけて下さい。ここにも偶然を起こさせた、主の導きがそこにあったということです。この偶然とは ナオミにとってもルツにとっても、その運命の転機となる大事なハプニングだったのです。

そこで落ち穂を一生懸命拾い集めるルツと、土地の所有者ボアズとの出会いが起こります。そこも今回は飛ばして 17 節に行きます。ルツは日が暮れるまで集めた。脱穀したものを袋一杯に入れた、1 エファほど (23 リットル、牛乳パック 23 個分) を背中にかついで帰ってきた。ナオミさんはこの沢山の麦を見て驚くのであります。「目を見張った」と訳されていますが、原語は見たという動詞です。ナオミさんの驚きを想像して そう訳したものと思います。

更に ボアズから貰った炒り<sup>いむぎ</sup>麦 (現代のポップコーン)、食べきれず残したものもナオミさんに差し出した。さて ここが今日の話のクライマックスですが、19 節、ルツが朝早く落ち穂を拾いに出かけ 暗くなるまで働き、今や背負いきれないほどの穀物の袋を目の前にしたナオミさんはすぐ尋ねます。一体どなたか様か知らないが、あなたにこんなに好意を示してくださったお方に祝福がありますように。

すると、ルツは答えて 誰のところで働いたかを告げた。そして 今日働かせてくださった方の名はボアズです。(ボアズの名を一連の話の一番終わりに出しているところも味な手法)。ボアズの名を聞いた途端、ナオミは 20 節、こう言いました。(ヘブライ語の順では) その人は主に祝福された人です。その主は慈しみを惜しまなかった。さらに 22 節、わたしの娘よ、素晴らしいことです。あそこ (ボアズの畑) で引き続いて働かせてもらえるとは!

ボアズは、ナオミさんの死んだ夫エリメレクの血縁の人であった。その人に親切にしていた。しかも 収穫期がずっと続く限り、穂を拾わせていただけける。ナオミさんの驚きと喜びを、ここで十分に読み取る事ができます。ナオミさんがルツを伴ってベツレヘムに帰ってきたときは、不幸と悲しみのどん底であった。主はひどいことをわたしにした。ナオミと呼ばず マラと呼んでというほど。しかし今、ルツが背負ってきた大量の麦とそれを拾わせて貰ったその畑が、有力な親戚のボアズの畑であったことを知るや、好意を示した人に祝福があるよう、二度も主をほめたたえたのです。

そして 主は慈しみを惜しまれないお方です。主は正<sup>まさ</sup>しくどん底に打ちひしがれたナオミさんを、高く引き上げてくださったのです。苦しみに遭わせた方が主であればこそ、彼女を高く引き上げられた方も同じ主でした。この主以外に ナオミさんにとって主は他にないのです。ナオミの信仰、苦しみの底にあっても主、喜びの時にも主、主のほかに主はない、これがナオミの信仰です。詩編 30 編を読んでみて下さい。このナオミの徹底した信仰を学びたいものです。

〔参考〕

ルツ記 1 章 3 節

口語訳 ナオミの夫エリメレクは死んで、ナオミとふたりの男の子が残された。

文語訳 ナオミの夫エリメレク<sup>しに</sup>死<sup>す</sup>て ナオミとその二人の男子<sup>むすこ</sup>のこさる

NKJV Then Elimelech, Naomi's husband, died; and she was left, and her two sons.

詩編 30 : 6 泣きながら夜を過ごす人にも

喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。

30 : 12 あなたはわたしの嘆きを踊りに変え

<sup>あらぬ</sup>粗布を脱がせ、喜びを帯としてくださいました。

30 : 13 わたしの魂があなたをほめ歌い

沈黙することのないようにしてくださいました。

わたしの神、主よ

とこしえにあなたに感謝をささげます。